

たまプラーザ(横浜市青葉区)で
開催された「朗読座」の会場にて

朗読座



「凜たる女性」の肖像
第13回 撮影＝遠藤 宏

あいの みのり
紺野美沙子

(俳優)

11年10月下旬、1周年を迎えた朗読座の記念公演「さがりばな」で朗読を行なう紺野氏

朗読で心を癒やす俳優

「震災後、自分ができることはないか、そう考えてたどり着いた答えの一つが、一周年を迎えた朗読座」での公演でした」

俳優業の傍ら、国連開発計画(UNDP)の親善大使としてこの十三年間で九つの国・地域を訪問し、途上国で苦難の生活を送る人びとを視察するとともに、現地のスタッフを励まし続けてきた紺野美沙子氏。これらの活動に加え、二〇一〇年十月からは地域の結びつきを強めようと、自身が担当する朗読に音楽や絵画などを組み合わせた「朗読座」をたまプラーザ(横浜市青葉区)を拠点にして主宰してきた。朗読で日本語の美しさや言葉の持つ力を伝え、人びとの心を潤す場がほしい、との思いからであった。

二〇一一年十月、この「朗読座」は活動から一周年を迎えた。その記念公演で紺野氏が朗読の題材に選んだのは写真絵本の「さがりばな」(講談社)。震災後、写真家・横塚眞己人氏から贈られたもので、沖縄・西表島の水辺に一夜だけ花を咲かせる幻の花を通じ、生きるこの意味を問いかける感動作だ。

一語一語、渾身の力を込めて朗読する紺野氏。何か自分の魂をも同時に燃焼させているかのような紺野氏の朗読の姿は、作品の内容も相まって哀切そのもの、会場には不思議な一体感が生まれた。





石巻市源波地区にある黄金浜会館(自治会館)で、被災住民たちと一緒に記念撮影に応じる。「冬を迎えて、先のみえない不安に怯える方たちがいる。自分たちはこのまま忘れられてしまうのではないか。そう嘆く被災地住民の姿に心を痛めました」(紺野氏)

国連開発計画(UNDP)親善大使の活動の一環として、宮城県石巻市鹿立(すだち)港を訪れた紺野氏。写真の漁師は、現在被災地にさまざまな支援活動を行なっている認定NPO法人JENによって奇蹟されたもので、この日紺野氏は地元の漁師やボランティアとともに、手編みの漁網づくりに加わった

